

東アジアの近代化と漢学

シンポジウム in Paris

日時：2017年2月11日（土）13:30~17:00

会場：パリ第7大学 グラン・ムーラン C棟 4階 479号

(Université Paris Diderot, Grands Moulins, Aile C, 4ème étage, salle 479C)

参加無料・当日受付

～開催趣旨～

19-20世紀における東アジアの近代化過程において、伝統的な学知がどのような役割を果たしたのかという問題は議論されて久しいが、我々は今なお様々な問題を抱えている。日本国内の人文系領域の研究状況において、近代と前近代の断絶は解消されていない。他方、グローバル化や情報化社会の進展とともに、ローカルな情報発信が活発化することによって新たな研究動向が生まれており、また中国・韓国・日本など東アジア各地で伝統学知の再評価の動きもある。

「漢学」(漢文による学び)をキーワードにして、現状と今後の展望を見据えながら、東アジア諸地域の近代化の問題を討議する。

第1部: 報告 (敬称略・発表順)

町 泉寿郎 (二松學舎大学)

「渋沢栄一と三島中洲の接点」

清水 信子 (二松學舎大学)

「江戸後期から明治期における考証学—海保漁村を中心として」

ヴィグル マティアス (浙江大学)

「19世紀初期における日本医学の近代化の幕開け
—針師石坂宗哲とシーボルトの交流を例として」

キリ パラモア (ライデン大学)

「20世紀政治儒教の世界的様子」

エディ デュフルモン (ボルドー第3大学)

「明治時代における哲学の成立の一側面。孟子、ルソーとカントの
出会い。アルフレッド・フイエと中江兆民との折衷主義について」

牧角 悦子 (二松學舎大学)

「中国の近代学術」

司会 ハイエク マティアス (パリ第7大学)

第2部: 討論

司会 江藤 茂博 (二松學舎大学)